

本の題名って大事だよ。あんまりな題名の本は手にも取らない。

(このまえ『絶叫城殺人事件』なんて読んだのは確かに私ですが…)

『昨日にまさるいとしさの』『限りなく透明に近いブルー』なんて題名が好き。

今回の『葉桜の季節に君を想うということ』も題名が好きな本に入る。

いくら単純でも、単に長い題名ならいいということでもなく

『遅れてきた青年』『放課後』なんていうのも好きよん。

題名	作者	コメント	評価
幻の声 —髪結い伊佐 次捕物余話— (文春文庫)	宇江佐真理	町方同心の下っ引きをつとめる廻り髪結いの伊三次。想い人の深川芸者のお文や町方同心の夫婦の話が一話ごとにまとめられている。	☆☆☆
海辺の扉 上下巻 (角川文庫)	宮本輝	ちょっとしたことで息子を死なせてしまい妻とも離婚をしてギリシャで新たな生活をする男の「再会」をテーマにした話。	☆
花の降る午後 (角川文庫)	〃	善良な人々ってあとがきに書いてあったけれど、誰の事かと思うくらいの鼻につく女の人が主役。三分の一読むのが限界だった。	(>_<)
葉桜の季節に 君を想うとい うこと (文芸春秋)	歌野晶午	前からちよろちよろと読んでいた歌野晶午が一気にこの本でメジャー路線に。「本格ミステリ大賞」「このミス」「本格ミステリベスト10」で一位。この重なりすぎは他にになにも読むべき本がなかったようで淋しくもあるね。でも、素直に期待して読んだ。一言。読み手の思い込みを利用した「え？え？なに？なに？」って結末でした。	これは絶対に映像化にはならない。 間違いない ☆☆☆★
奇跡の人 (新潮文庫)	真保裕一	事故を起こして脳死判定を受けた主人公が母親の献身的な看病のもと回復していき奇跡の人と呼ばれるが、それまでの生活習慣も記憶も一切がなくなる。8年間の入院生活の間に母親は亡くなり退院後の一人暮らしの中で、事故の前の自分探しを始める。8年間の穏やかな自分と、見つけてしまった事故前の自分とのギャップ。早く優しい人たちの所に戻って、一生思い出することが出来ない記憶はそのままにしておけばいいのになら主人公以外の登場人物のみんなが思ってるように私も素直に思ってしまった。	主人公が31歳とわかったとたん、山崎まさよしでドラマ化された話だった気がついた。 見たことはなかったけれど、山崎まさよしがあまりにびったりで怖い。 ☆☆☆☆

<p>トリック the novel (角川文庫)</p>	<p>蒔田光治 林誠人</p>	<p>発熱したときに寝ながら一日で読んだ。軽いし、楽しいし具合の悪いときに最適な本だった。売れない手品師と大学の物理学の教授のコンビは、東野圭吾の「予知夢」に似ているけど、こっちのほうが楽しい。手品の上手い人って尊敬。こどもには将来はマリックさんの弟子がいいよって薦めてる。</p>	<p>☆☆☆</p>
<p>リセット (新潮文庫)</p>	<p>北村薫</p>	<p>思いを寄せた人が戦争中に亡くなった。時を経てその人の意識を持った小学生が目の前に現れるが、その小学生を助けようと今度は自分が命を落とす。そして時間が経ちまた繰り返され、つながっていく体験、記憶一。 生まれ変わりのテーマに期待しすぎた。</p>	<p>戦争の場面が長すぎる。アニメ化されたほうが素直に感動できるかも。 ☆</p>
<p>センセイの鞆 (平凡社)</p>	<p>川上弘美</p>	<p>食べ物の好みがあうっていうのは付き合いでは大事なことだと思う。一杯飲み屋で再会した37歳のOLと30歳以上も離れた高校時代の先生は、食の嗜好だけでなく生活観や人との距離のとりかたも似ている。必ず二人の間に席をひとつあけて座り、手酌して別会計でぽつぽつと言葉を交わす、そんな付き合い方が楽しい。気のいい同級生との付き合いからセンセイへの思いに気がつくわけだけど、老いの負の部分認めながら、こんな恋ならしてみたいと思えるとても気持ちがいい『恋愛小説』。渋々、携帯を持ったセンセイが「ケータイとは言わず携帯電話ということ」なんていう拘りが可愛い。男はいくつになっても可愛い部分を持つてることが大事だね！(オンナも同じって?)川上弘美は「蛇を踏む」で挫折したけど、この本はほんとに楽しかった。</p>	<p>次はグリコが『隣に住む熊にお茶を誘われる話』の本を貸してくれるって。グリコいわく、熊にお茶を誘われてもそれが自然なんだって。。一体どんな話なんだろう。 o(^-^o)ワクワク ☆☆☆☆ ☆</p>
<p>巡礼者たち 家族狩り 第四部</p>	<p>天童荒太</p>	<p>10年位前に出た『家族狩り』を5部に分けて完全改稿。残酷さだけが印象に残る『家族狩り』とは違って、家族愛、人間愛(あたしが使うと嘘っぽいなあ)の話になっていた。ヘンな論理の殺害動機や犯人探しよりも、人と出逢う事で美術教師が変わっていく様や、刑事のふたつの家庭の話とかの方が面白い。</p>	<p>漫画『MONSTER』の感想にも似たようなこと書いた。ひたすら人間ドラマが</p>
<p>まだ遠い光 家族狩り 第五部</p>			

		<p>もっとも、5部に渡る長い話なんだからそっちが面白くないと読めないね。</p> <p>価格のことを考えて5部に分けて毎月の発行にしたとのことだけど、まとめて読みたかったって気もする。あ、全部出てから読めばよかったのか。。</p>	<p>好きってことなのね。</p> <p>☆☆☆☆</p>
<p>ハリー・ポッターと炎のゴブレット 上下巻 (静山社)</p>	<p>J Kローリング 松岡佑子訳</p>	<p>3巻までは一気に読んで、発売からかなり経ってからの4巻目。多くの魔法使いから恐れられ、その名前も呼ぶことが出来ない「あの人」が、捕らえたハリーに対して自分の過去を話す姿はやけに人間っぽくて妙だった。</p> <p>一度、映画をみているので活字が映像で浮かぶのが楽しかった。</p> <p>ただストーリーとは全く関係のない終わりの方のたったひとことに「もののけ姫」のときに感じたものよりももっと単純な生理的嫌悪があつて、読まなきゃよかったって後悔した。この言葉を忘れたときには、もっと面白かったって言えると思う。身体とは対照的なこんな情緒の線の細さが情けない…。</p>	<p>クモが二回出てきたところはイキオイつけてすっとぼしたぜっ。へへ</p>
<p>迷宮廻行 (新潮文庫)</p>	<p>貫井徳郎</p>	<p>小心者の男が失踪した妻を捜すため、ヤクザを相手に立ち回る。2作目の「烙印」の書き直しということ。終わりにかけてはハチャメチャで、親友は死んじゃうし、ヤクザは殺しちゃうし、探してた奥さんは自殺しちゃうし。これはひっくり返るんだろうと信じてたらそのまま奥さんに「おやすみ」なんて言って終わっちゃうし。。あぁびっくりした。</p>	<p>思い切ったネタばらししてます</p> <p>☆</p>

☆ 漫画『MONSTER』 全18巻 浦沢直樹

連載のときにちょこちょこ読んでいたのを、やっと全巻まとめて読んだ。

怪物ヨハンを自らの天才的な外科手術で助けてしまったDr. テンマ。ヨハンの連続殺人の罪をかぶせられ警察から追われる身で、幕を引くのは自分だとテンマはヨハンを追う。そのテンマを連続殺人の犯人だと信じる刑事が追う。

逃げる先々で作り出される人間関係がいい。テンマの人間性で繰り広げられる人間ドラマとしての沢山のエピソードはとっても面白かった。(特に、ニナがアルバイトしてたお店の殺し屋のおじさんと、最後にテンマの元奥さんを守ったブラピ似の人がよかった)

ストーリーとしてみると、終わり方が嫌い。射撃訓練まで受けたテンマはやはり拳銃を撃つ

ことが出来ない。最後は読んでいたので結末は知ってはいたけど、「撃てえ〜！撃つんだ、テンマァ！」と丹下段平になってしまった。撃たないからこそテンマなんだろうからそこは納得しても、あの終わり方だったらいつでも終えられたし、「さあ、みなさんがここからはどうなるのか考えましょう」っていうのは肩透かしをくったようであまり好きじゃない。

ところで例によって、この全巻を健ちゃんから借りた。

最後の18巻は付録と一緒にビニールで閉じてあった。そのビニールはあたしが破かせてもらった。ってことは、健ちゃん、買っただけで読んでないのね。

まだずっと先の話だけど、『バガボンド』が連載終了になったらまた全巻貸してね。今度は最終回も読まないで待ってるからね。にこにこ え？『バガボンド』は嫌いだって？でもテレカプレゼントがあったら、また買っちゃおうと思うよ(^_^)v

